

「アテネ文庫」の研究 (その1)

清水 康次

はじめに

「アテネ文庫」は、昭和23(1948)年3月25日から昭和35(1960)年4月10日まで発刊を続けた、総計301点の叢書である。A6判紙装の簡単な装丁で、当初60頁、後に80頁となる薄冊の文庫本である。価格は当初1冊15円。すぐに20円、25円と上昇し、翌昭和24年には1冊30円となり、定着する。矢継ぎ早に編を連ね、昭和31(1956)年までの9年間に294点を刊行。このあたりで生産力を失い、ほぼ役割を果たし終えているといえる。最晩期の昭和33年・34年に刊行された6点は、100頁前後となり、価格も60円となっている。「アテネ文庫」として守ってきたスタイルそのものが崩れる形で終息していく。

内容は、哲学・文学から人文科学・社会科学・自然科学のすべてのジャンルに及び、創作・評論・概説・エッセイ・評伝・辞書・選集等のさまざまな形式のものを含みながら、敗戦後の日本に急速に普及し、本に飢えた読者に浸透して、大きな反響を及ぼした。文学作品も一部含みつつ、大部分は、内容的には現在の「新書」に相当すると言う方がわかりやすいかもしれないが、「文庫」・「新書」の定義や内容的な区分が明確にあったわけではない。以下の文章においては、「文庫」・「新書」・「叢書」という言葉に、あまり厳密な区



第1編 久松真一『茶の精神』表紙

分を設けずに広義の語として使っておきたい。

紀田順一郎は、「文庫の過去・現在・未来」^(注1)という文章の中で、「戦後の文庫黄金時代」について概観し、「アテネ文庫」を特筆している。

第二次世界大戦後は「新潮文庫」第三次（一九四七）、「春陽文庫」（一九五〇）、「現代教養文庫」（一九五一）、「青木文庫」（一九五一）、「学燈文庫」（一九五一）、「国民文庫」（一九五二）など新しい文庫が誕生、不況化の一九五一年（昭二六）から翌年にかけて第一次文庫ブームを現出した。同時代の読者にとりわけ清新な印象を与えたのは、数十ページに凝縮された内容に「暮らしは低く思いは高く」（ワーズワース）の理想を盛った「アテネ文庫」、「古いものを新しい革袋に」をモットーに名著を網羅した「角川文庫」（一九四九）であった。

敗戦直後の日本に、新しく誕生する膨大な種類の雑誌と同様に、新しい文庫も雨後のたけのこのように乱立した。10年余り続いた「アテネ文庫」は、その中で短命とは言えず、しかし、長命とはなおさら言えない。メジャーな文庫・新書の復活や、後に特色を持って長生きすることになる文庫・新書が態勢を整える前に、一歩先んじて、重版や復刊ではない新刊書として多くの点数を刊行する^(注2)。そして、大きな反響を起し、広く愛読され、隆盛を誇った後に、やがて消え去っていった、いわば幻の文庫である。一般的に戦後の出版や書誌については、雑誌類の調査や研究はかなり進んできているが、叢書類の研究はほとんどなされていないのが現状であるが、この文庫についてもほとんど本格的な調査や研究がなされておらず、管見の範囲では、井狩春男『文庫中毒』^(注3)が、301冊の全点の書名と著者名のリストを挙げている程度である。

奥村敏明に、この文庫についてのさらに詳しい紹介文^(注4)があるので、少々長くなるが、その一部分を引用しておこう。

アテネ文庫の創刊は一九四八年三月二十五日で、この日には①の久松真一『茶の精神』から⑮川端康成『私の伊豆』までの十五点が同時に刊行された。その次の発行は⑯和辻哲郎『ケーベル先生』で、同年五月十五日である。そして終刊は、一九六〇年四月発行の⑳大西克礼『古典的とロマン的』である。（中略）

アテネ文庫で有名なのは、三木清が書いたといわれる岩波文庫の「読書子に寄す岩波文庫発刊に際して」と並び称される格調の高い名文の「アテネ文庫刊行のことば」である。

昔、アテネは方一里にみたない小国であった。しかもその中にプラトン、アリストテレスの哲学を生み、フィヂアス、ブラクシテレスの芸術を、またソフォクレス、ユウリピデスの悲劇を生んで、人類文化永遠の礎石を置いた。明日の日本もまた、たとい小さく且つ貧しくとも、高き芸術と深き学問とをもつて世界に誇る国たらしめねばならぬ。「暮しは低く思いは高く」のワーズワースの詩句のごとく、最低の生活の中にも最高の精神が宿されていなければならぬ。本文庫もまたかかる日本に相応しく、最も簡素なる小冊の中に最も豊かなる生命を充溢せしめんことを念願するものである。切り取られて花瓶にさされた一輪の花が樹上に群る花よりも美しいごとく、また彫刻におけるトルソーが、全身において見出されない肢節のみのもつ部分美を顕現するごとく。

表紙は植物をデザインしている。表紙の装丁にはほとんど変化はないけれど、後期になるとタイトルなどを記入する矩形が縦長に拡大され、背表紙の下方に文庫名と文庫番号が入るようになる。表紙の色は、茶、緑、深緑、紺色などがある。

文中で言及されている「アテネ文庫刊行のことば」は、各冊の巻末に掲げられており、敗戦後の人々に向けての強いアピールとなっていたであろう。この「刊行のことば」の執筆者については、当時弘文堂書房に勤務し、編集者の一人であった臼井史朗が、「アテネ文庫創刊の頃」というインタビュー^(注5)の中で、「京都学派」とかかわる鈴木成高^{しげたか}の作と語っている。

紀田順一郎は、前掲の文章の中で、大正期から始まる文庫の歴史を振り返って、「文庫本を現在のような形で隆盛に導いたのは、やはり岩波文庫の功績に帰さねばなるまい。円本ブームが極点に達した一九二七年（昭二）に創業者岩波茂雄により創刊されたこの文庫は、古典や定評ある名著の普及をめざして発展してきた」と述べる。そして、この草創期の次に来る時期の文庫出版の動きを、以下のようにまとめている。

文庫という新しい形式の可能性を知った出版社は、続々とこのジャンルに参入した。その主なものは、社会科学関係に重点を置いた「改造文庫」、大衆文学を中心とした

「日本小説文庫」(一九三一、のちに「春陽堂文庫」～「春陽文庫」と改題)、文芸関係の「新潮文庫」第二次(一九三三)、「富山房百科文庫」(一九三八)などである。

すなわち、昭和10年代には、文庫という様式はすでに市場に定着し、多様化の時期に入っていく。文庫は、多くの出版社からさまざまな形式と内容で出版されていくが、それぞれの文庫ごとに特色化・専門化を図って分化していく傾向を見せていた。

戦時下の中断を挟んで再出発する昭和20年代、「アテネ文庫」は、この前代の発展の歴史を無視するかのように、あらゆるジャンル・さまざまな形式を試みながら、矢継ぎ早にコンパクトな小冊を多産していく。そして、絶対的な本の欠乏状況に対して、いわば、旱魃の地にスコールを降らせるように、301点を供給していく。敗戦後の日本が欠乏と混乱から再出発していく動きに乗じて、「アテネ文庫」は、文庫というものをもう一度カオスから立ち上げ、さまざまな試みを模索した上で急速に定型化し、独自のコスモスを作り出していく。そして、10年余り後には燃え尽きるように終刊していく。

このように時代に乗じ、かつ左右される命運において注目されるだけでなく、「アテネ文庫」は、その書名・著者名・内容を一瞥しただけで、その執筆陣の充実や内容的な密度の高さに驚かされる。「アテネ文庫」は、まず、その内容の充実において非常に魅力的であり、忘却の中から拾い上げ、発掘する価値があると思われる。

本年度から、長期間にわたることになるだろうが、その研究に着手したい。「アテネ文庫」の1冊1冊を調査し、その内容を調査するとともに、本を介して、執筆者や編集者たちの姿を捉えていきたい。そのことを通して、本の背後に広がる時代や社会の状況、さらに、学術や文化の情勢に目を向けていくこととしたい。本年度は、その手初めとして、第一部「アテネ文庫概観」において、その創刊に至る沿革を一瞥し、301点の内容を分類しつつ、10年あまりの間の変化を概観しておきたい。また、第二部「全点目録」において、301点の書名・著者名・初版発行年月日のリストを掲げておきたい。来年度以降、第

三部「各点解説」として、順を追って1冊1冊についての調査報告をしていくこととする。

第一部 「アテネ文庫」概観

1 出版社弘文堂書房と「アテネ文庫」

(1) 弘文堂書房の戦前期の動向

「アテネ文庫」の出版元である弘文堂書房（後に「弘文堂」）は、おもに経済・法律関係の図書を刊行している出版社として現在も存続している。創業は、明治31（1898）年、京都の古書店としての出発である。

『京都出版史 明治元年—昭和二十年』^(注6)の記事を引用する。

創業者は八阪浅次郎。明治31年に出雲寺文次郎より独立。寺町通押小路で古書業を開店。大正のはじめ、丸太町通寺町東への移転を機に出版業へ転向。大正6年、河上肇『貧乏物語』、続いて、小川郷太郎『経才講話』などを出版。特に『貧乏物語』は当時の大ベストセラーとなった。さらに、社会科学関係書の出版へ力を入れ、折からの大正デモクラシーの波に乗った。（中略）昭和11年合名会社弘文堂書房に組織変更し、東京に支店を設立。昭和13年、左京区田中西浦40に移転、また、本社機構を東京に移し、東京・京都で編集、製作をはじめ。昭和23～26年、改組して株式会社弘文堂と改称。昭和41年12月、経営に破綻をきたして弘文堂新社を設立。

『京都出版史』によれば、大正6（1917）年が出版社としての出発の時期であり、この年、雉本朗造『判例批評録 第1巻』、河上肇『貧乏物語』、フィッシャー、フィスク編、河上肇訳『如何に生活すべきか』、小川郷太郎『経済講話』の4点を上梓している。当時、河上は京都帝国大学に法学部教授として在任しており、続いて経済学部教授となる。京都という地の利を生かして、弘文堂書房は河上とつながり、『貧乏物語』という最初のヒットを獲得したといえる。以降、『社会問題管見』（大正7（1918）年9月）、『唯物史観研究』（大正10（1921）年8月）をはじめとする大正期の河上の著作と翻訳のほとんどが弘文堂

書房から刊行されている。この関係は、河上が京都帝大を辞職する昭和3年頃、『資本論入門 第一巻』（昭和3（1928）年4月～4（29）年2月）あたりまで続いている。

当時、弘文堂書房は、この河上の著作をはじめとして、マルクス主義の翻訳書・研究書を数多く出版している。大正期は法学・経済学の学術書・研究書の出版社としての歩みを続け、米田庄太郎・河田嗣郎・末川博・恒藤恭など、京都帝国大学の教官・研究者の手になる学術上の著作を多く刊行している。文学関係では、石田憲治の翻訳や著作が早くから見えるが、拡大する方向は見えない。むしろ、大正末期からは、東洋学の研究者たちとの結びつきが現れ、内藤虎次郎・鈴木虎雄・矢野仁一、さらに小川琢治などの学術書が手がけられている。

昭和期に入ると、その学術書の出版をさらに幅広く手がけていくと同時に、より啓蒙的な書物の出版に向かい始める。まず、昭和11（1936）年、「西哲叢書」の刊行が始まる。それはまた、「京都学派」との結びつきの始まりでもあった。

「西哲叢書」は、田辺元監修、四六判、各冊250～350頁。昭和11年に、高山岩男『ヘーゲル』、後藤孝梯『ソクラテス』、長沢信寿『プラトン』などを刊行、翌12年には野田又夫『デカルト』、木村素衛『フィヒテ』など、13年には下村寅太郎『ライプニッツ』などが刊行されていく。著名な西洋の哲学者・思想家を一冊ごとに取り上げ、その生涯をたどり、哲学や思想を紹介・解説し、続けてより踏み込んだ批評・評論を加えていくというのが、公約数的な内容である。

その「内容紹介」のパンフレットには、18点の既刊行の書名と内容紹介が並び、続刊予定の14点の書名が列記されている。その巻頭に掲げられている田辺元の「西哲叢書刊行趣旨」の一節を引用する。

（我国を見ると）未だ多数の哲学者を網羅して其思想に現代の立場から簡明なる解説を与へたものあるを知らない。本叢書の刊行は即ち聊か此欠を補はんと欲するものに外ならぬ。執筆者は何れも少壯気鋭の学者にして、現代の思想危機に対し特に敏感なる人々である。其叙する所は古代から現代に及ぶ西洋の代表的哲学者約三十人の思想であるが、しかし其解釈は断じて旧套を追ふものではない。（中略）想ふに、思想の必要

なること今日の如く大にして、而もその貶斥せらるゝこと今日の如く甚しきはない。（中略）若し此叢書にして、今日なほ理性の光明を喪失せざらんと欲する人々、わけても青年諸君の伴侶たることを得ば、その期するところの使命はすなはち達せられるのである。

続いて掲げられる、西田幾多郎の「推薦の辞」も、ほぼ同様の趣旨である。

私は一つにはかゝる叢書が古典的なものへの興味を唆り且つその手引となるものとして、その発刊を喜ぶと共に、一つには専門外の人にして大なる哲学的思想の梗概を知らうとする人々への手段として、かゝる叢書を推奨したいと思ふのである。（中略）哲学は最高の常識にして又諸の学問の基礎となるべきものである。今日我国の学問は部分的となりその統一を失ひ、常識は膚浅にして感情的なる嫌なしとせない。かゝる叢書の必要なる所以である。

「西哲叢書」の発刊の年である昭和11年は、弘文堂書房が合名会社弘文堂書房に組織を改め、東京に支店を設立した年である。弘文堂書房の出版路線は、専門書から啓蒙書に重点を移し、より多くの読者に向い、桁違いの発行点数・発行部数に挑み始める。

続いて昭和14（1939）年2月には、「教養文庫」の刊行が始まる。「教養文庫」は、さまざまな分野にわたる啓蒙的な叢書であり、三六判のやや幅の広い判型（現在の新書判）で紙装、150～200頁のコンパクトな「新書」であった。ごく初期の初版には、巻末に「発刊の辞」が掲げられていた。その一節を引用する。

我々の国民生活の過去を新しく顧み、伝統を正しく生き生きと眼前に更生せしめると同時に、また世界に於ける文化を広く摂取し、正しく批判しつつこれを抱擁することを必要とする。教養の世界史的拡大と伝統的沈潜、——実にこの二方向の総合からしてのみ、現代の日本の創造的実践は期待される。（中略）今日の国民的使命に対して真摯なる関心を有する一般の人々に向つて、哲学・宗教・芸術・文学・自然科学・数学・法律・経済・歴史・地理等文化の各部門に互つての通路を開き新展望を与へることをこの文庫は目的とする。

山内得立『人間のポリス的形成』を第1編とし、柳田謙十郎『日本精神と世界精神』が第2編、以下30点以上がこの年のうちに刊行される。「教養文庫」は、前年に刊行を開始した「岩波新書」に対抗したものであり、「岩波新書」が、昭和13年11月20日という最初の発刊日に20冊を同時刊行し、昭和14年には1年間で30冊以上を刊行したことに、量的にも拮抗している。

ごく一部になるが、例示として、著者名・書名・初版発行時期（ただし、一部、初版未確認のものを含む）を示しておく。

(編数)	(著者名)	(書名)	(初版発行年月日)
第3編	高坂正顕	歴史哲学と政治哲学	昭和14(1939)年2月14日
第5編	肥後和男	日本国家思想	昭和14(1939)年2月11日
第8編	太宰施門	フランス近代作家	昭和14(1939)年2月13日
第18編	湯川秀樹	最近の物質観	昭和14(1939)年7月15日
第26編	長与善郎	日本文化の話	昭和14(1939)年9月15日
第29編	亀井勝一郎	島崎藤村	昭和14(1939)年11月20日
第37編	鈴木成高	ランケと世界史学	昭和14(1939)年12月20日
第52編	植田寿蔵	日本美術	昭和15(1940)年5月25日
第58編	小竹文夫	現代支那史	昭和15(1940)年6月10日
第87編	田中美知太郎	ソフィスト	昭和16(1941)年2月20日

「教養文庫」は、昭和18年までに130点ほどに達し、戦後に復活して重版と何冊かの新刊を刊行している。「岩波新書」と同じ判型であり、さまざまな分野の教養書の集積となりえている点において、戦前の「岩波新書」と同列に評価され、あるいは対比して調査研究されるべき叢書である。しかし、現在はほとんど顧みられていない。

弘文堂書房は、この「教養文庫」によって、その出版の分野を「哲学・宗教・芸術・文学・自然科学・数学・法律・経済・歴史・地理等文化の各部門」に拡大し、教養書・啓蒙書の出版社としての名実を整えると同時に、大出版社に成長し、執筆陣としても、東京圏を含むより幅広い人脈とつながっていった

と考えられる。この展開が戦後の「アテネ文庫」を用意するものであったことは言うまでもない。

さらに、昭和15(1940)年1月から刊行が始まる「世界文庫」にも触れておかなければならない。「世界文庫」は、西洋文学を中心とする翻訳叢書である。判型は、「教養文庫」と同じ三六判幅広の判型（現在の新書判）で紙装、120～220頁の薄型の本である。スウィフト著・中野好夫訳の『ガリヴァ旅行記 上』を第1編し、初期の版の巻末広告では、斎藤勇、木村謹治、辰野隆の名を挙げて「監修」とし、次のような一節を持つ宣言文を掲載していた。

顧るに吾々の過去七十年は外来文化輸入の歴史であつた。撰取の急なる余り、そこには無批判な要素の混入したる事實は覆ふべくもなかつた。今や時代は、過渡的混迷より超脱して過去の外来文化を徹底的に批判撰択し吾々自らの新しき文化の創造を強要してゐる。この時に当り、世界言語芸術の精華を夫々の国の文学史的展開に於て厳選して世に贈られんとする吾々の試みは十分に意義あることと信ずる。

巻末の広告などを参照して、例示として著者名・書名・翻訳者名をいくつか拾っておこう（ただし、原本未確認のものが多い）。

(編数)	(著者名)	(書名)	(翻訳者名)
第9編	プルースト	心の間歇	井上究一郎
第25編	ロマン・ロラン	敗れし人々	宮本正清
第20編	ラスキン	近代画家（一）	沢村寅二郎ほか
第36編	リルケ	ロダン	石中象治
第37編	オースチン	自尊と偏見（上）	海老池俊治
第50編	ジイド	イザベル・青春	今日出海
第51編	ジョイス	ダブリン市井事（上）	安藤一郎
第58編	ツルゲーネフ	貴族の巢	馬場哲哉

翻訳文学の叢書としては、新潮文庫・春陽堂の複数の文庫・岩波文庫などが

既に版図を競っていたので、どれほどの競争力があったのかは不明である。しかし、この翻訳文学の叢書も短期間に続々と発刊され、この年のうちに約50冊が並んでいく。

これらの叢書の矢継ぎ早の刊行によって、昭和15(1940)年の弘文堂書房の新刊書の点数は100点を超えている。昭和16(1941)年から昭和18(1943)年までの3年間も、1年間の新刊書の点数は50点を超え続ける。翌年以降は戦時体制の中で点数は激減するが、この数年間の経験とノウハウの蓄積が、戦後のすばやい立ち直りと、「アテネ文庫」の刊行を準備したのである。

(2) 「アテネ文庫」の創刊と戦後の動向

昭和23年3月に創刊される「アテネ文庫」は、京都への軸足に戻ったところから始まる。「西哲叢書」や「教養文庫」を生み出した、京都帝国大学の研究者たちとのつながり、就中、西田幾多郎を師とする「京都学派」、およびその周辺の人々とのつながりがまず顕著に認められる。例を挙げていくと、第1編の久松真一『茶の精神』、第4編の西田静子・上田弥生『わが父西田幾多郎』、第5編の木村素衛『花と死と運命』、第7編の高坂正顕『実存哲学』、第10編の下村寅太郎『科学以前』、第16編の和辻哲郎『ケーベル先生』、第19編の鈴木大拙『青年に与ふ』、第25編の仁科芳雄・鈴木大拙・下村寅太郎・西谷啓治『科学と宗教(座談)』……と続いていく。第3編の深田康算『美しき魂』、第6編の青木正児『抱樽酒話』、第24編の田中美知太郎訳『ヘラクレイトスの言葉』も文学部の教官・研究者たちの著作であり、「アテネ文庫」の出発は、「京都学派」や京都大学とのつながりに支えられたものであった。

編集に携わっていた臼井史朗は、前掲のインタビューの中で、「「アテネ文庫」が創刊されるにいたった経緯」を問われて、次のように語っている。

昭和二十一年に公職追放が行われて、京都学派の先生方もみな職を失われてしまったんですね。先生方とは長い間、出版事業を通じてお世話になったわけですから、生活の苦しいときに何か企画して出版をしなければということになったんです。まあ、

企画会議といっても私が使い走りで購入してきた「どぶろく」と「まんじゅう」を先生方に振舞って談論風発の議論をする、いわば「どぶろく会議」の中からでてきたようなものなんです。戦後もそうした戦前のネットワークを持っていたからできたんじゃないかなと……。

昭和21(1946)年5月、文部省は、占領軍の要求を受けて、「教職員の適格審査をする委員会に関する規程」を定め、各国立大学は「適格審査委員会」を設けて対応する。『京都大学文学部五十年史』^(注7)では、当時の様子が次のように記されている。

昨日までの同僚を被告的な立場に置き、その思想行動を批判し判定を下すのは、定められた法的規準によるものとはいえ、審査する教官側としてもその胸中には複雑なものがあつた。

文学部では戦時中その言論を通じて今次戦争の聖戦たる所以を説き、戦争の遂行に積極的に協力した若干の教官があり、これらの人びとが当然追放ならびに審査の条項に該当するものと考えられた。またそのような国策遂行機関に席をおき、責任ある地位において研究や宣伝に従事した教官も同様に該当者と見なされた。

京都帝国大学の文学部に、昭和13(1938)年4月に開設され、21(1946)年3月に廃止された「日本精神史講座」があつた。「国体明徴・日本精神の探究などが盛んに唱えられていた」時期に、東京と京都の帝国大学に増設された「日本思想史・日本精神史に関する講座」であつた。昭和21年、公職追放は、その講座の教授であり、国民精神文化研究所の勅任所員でもあつた西田直二郎、同講座の教授であり、大日本言論報国会の理事でもあつた高山岩男^{こうやま}から始まり、「文学部教職員適格審査委員会」の審査等を経て、西谷啓治（宗教学）・鈴木成高（西洋史）・松村克己（宗教学）・中村直勝（国史）らが「不適格」とされ、退職となった。また、当時人文科学研究所の所長であつた高坂正顕も公職追放となっている。このうち、高山岩男・西谷啓治・高坂正顕は、西田幾多郎没後（昭和20年6月7日没）の「京都学派」の中心的メンバーである。

これらの人々の著作が「アテネ文庫」にどの程度入っているのかを見ていく

と、まず、高山岩男は、「アテネ文庫」において、第53編『弁証法入門』、第66編『哲学入門』、第115編『哲学用語辞典』、第154編『哲学年表』の4冊を執筆・編集している。公職追放や「京都学派」との関係の有無にかかわらず、高山以外に、「アテネ文庫」から4冊の著作（単著）を出している著者はほかにいない。高坂正顕は、第7編『実存哲学』、第31編『続実存哲学』、第81編『ニイチェ』の3冊を執筆し、第46編の座談会『実存と虚無と頽廢』に参加しており、高山に匹敵する。さらに、第5編の故木村素衛の日記の抄録である『花と死と運命』において、京子夫人の「跋」に「日記は高坂さん（正顕氏）の御好意で出す事になつた」と記されているように、文庫の編集への関与が認められる。西谷啓治は、第86編『ロシアの虚無主義』を執筆し、第25編の座談会『科学と宗教』・第46編の座談会『実存と虚無と頽廢』に参加している。また、第37編の西田幾多郎の日記の抄録である『寸心日記』を編集し（同書「あとがき」による）、さらに、第14編のキエルケゴール著・久山康訳の『野の百合・空の鳥』の訳者のあとがきに「西谷啓治先生の全体に互る懇切な御教示を得て、出版されることとなつた」とあることなど、文庫の編集への関与が随所にうかがえる。臼井史朗の言のとおり、「京都学派」の中でも公職追放となった人たちが「アテネ文庫」の企画や編集にもっとも深くかかわっていたことが確認される。

高山岩男・高坂正顕・西谷啓治は当時京都帝国大学の教官であったが、3人から教えを受け、後に京都大学文学部哲学専攻の教授となった辻村公一に、彼らの当時の生活状況についての記述がある^(注8)。

三先生は、生活の基盤を奪われ、孰れも惨澹たる生活の内にならながら哲学を止められず、ペン一本を頼りに生活の資を得ていられた。五人の御子様のうち上の御二人が結核を病まれ御老母様をかかえられた西谷先生が、最も苛酷な生活を送っていられたが、先生には京都を離れる気配は微塵もなかった。比較的余裕が感じられたのは、高坂先生の御宅であった。一番御若い高山先生の御宅には未だ幼い食べ盛りの御子様達が四人もおられ然も北白川平井町の御宅から立退きを迫られていた。

辻村は、さらに、高山が京都を離れ、浜松に転居し、農家に住んで生活費を抑えながら、執筆に専念していった様子を語っている。公職追放という処分の苛酷さと、生活の困窮、そして、敗戦後の日本において、改めて自身の哲学や研究を打ち立てていこうとする労苦がうかがえる。そのような負荷を背負った人たちが、「アテネ文庫」の企画を支え、編集に協力していくのである。

臼井史朗のいう「企画会議」、すなわち「買い出してきた「どぶろく」と「まんじゅう」を先生方に振舞って談論風発の議論をする、いわば「どぶろく会議」」には、上記の3人に限らず、折々の出席者がいただろうが、その「会議」の中で続刊の企画が相談されていたとすれば、そこではまず、出席者自身の経済状況・研究状況がそのままに語られ、執筆の希望や原稿料・印税、その前借のことなどが話し合われていただろう。また、出席者の同門たち・友人たち・弟子たちについても、誰それに仕事がなく、収入の道がない、誰その遺族が経済的に困窮している、誰それがこういうテーマに取り組んでいる、誰それが既に原稿を書き溜めているなどという、具体的な生活状況・研究状況が話題にされていたと推測される。公職追放となった者の窮状を救うための企画をはじめとして、仕事にありつけず困惑する同輩・後輩たちを救済するための企画、また、新しい時代に再出発しようとしている知人たちに機会を与える企画が提出されていたのだろう。

「アテネ文庫」を一見した限りでは、戦後日本の出発に合わせて新しく誕生した、まだ垢や傷を帯びていない、幼くういういしい叢書という受け取られ方をされやすい。しかし、内実は、「京都学派」・「戦争協力」・「公職追放」という負の時代色と、経済的困窮という生活色を背負いながら、そこから立ちあがって新しい時代に再出発しようとする、影と光とを担った叢書であったといえる。出発の実状に即して言えば、新鮮さや若々しさに充ちた叢書というイメージではなく、重い試練の中で前途を模索する叢書というイメージの方が、より事実に近いだろう。敗戦後の混乱状況の中で、どのようにして生きていくのか、どのようにすれば復活できるのか。自分自身の内情や苦しみと仲間たちの内情や苦しみを見せ合いながら成り立っている「ネットワーク」が、

「アテネ文庫」刊行の推進力として大きく働いていく。新鮮でもニュートラルでも無色透明でもない、時代色と生活色を背負った具体的な個々人の現実がこの叢書を充たし、それが、文庫としての魅力と多様性を作り出していったと考えられる。

敗戦直後から始まる総合的で教養的な叢書の中で、「アテネ文庫」に先駆けた叢書として、昭和20（1945）年に発刊される生活社の「日本叢書」があり、昭和21（1946）年に発刊される創元社の「百花文庫」がある。どちらもコンパクトな小冊であり、前者は100点を数え、後者も数十点が刊行された。この2つの叢書も、現在ほとんど顧みられていない重要な叢書であり、調査・研究がなされるべきであると思う。執筆者や内容は「アテネ文庫」同様に充実しており、現代からの再読に堪えるという意味では、「アテネ文庫」を凌ぐといえるかもしれない。しかし、これらと比較して見たとき、より瀟洒で安定感のある「日本叢書」や「百花文庫」に対して、「アテネ文庫」からは、混沌としたエネルギーや、熱い意気込みのようなものが伝わってくるように感じられる。「アテネ文庫」が当時大きな反響を巻き起こし、強い印象を残していること、また現在から見ても魅力的に思えることが何によってなのかと考えていったとき、執筆者の力量とか、著作の内容と質とか、形式・価格・装丁とかという要因とは別に、そのような混沌としたエネルギーや熱い意気込みが大きな要因であったといえるのではないかと思う。

「アテネ文庫」以後の弘文堂書房について、2つのことを付記しておきたい。

1つは、「アテネ新書」という叢書の刊行についてである。

「アテネ新書」は、昭和24（1949）年11月から刊行が開始される、総合的でより専門的な叢書である。「アテネ文庫」発刊から約2年後、より容量の大きい、新たな叢書が出発する。B6判、紙装であるがハードカバーの上製本であり、本文は150～250頁。当初の価格は150円前後で、「アテネ文庫」の当時の価格30円と比べると数倍の高値である。第1編は西谷啓治『ニヒリズム』、第2編は朝永振一郎『量子力学的世界像』、以下、レヴィット『ウェーバーとマルクス』、

猪木正道『ドイツ共産党史』、植田寿蔵『セザンヌ以後』、トロワフォンテーヌ『サルトルとマルセル』、高坂正顕『現代哲学』、小島祐馬『中国の革命思想』、矢島祐利『近世科学史』、ダーシー『カトリシズム』、高山岩男『哲学概説』と続いていく。執筆者は、やはり当初は、「京都学派」や京都大学の研究者が多いが、次第にその顔ぶれも広がっていく。

内容の例として、第7編の高坂正顕『現代哲学』（昭和25年3月15日発行）を見ておこう。この本は、「プラグマティズム」「新実在論」「生の哲学」「実存哲学」「現象学その他」の5章からなり、それぞれに代表的な哲学者を挙げて、その思想を概括していく。「アテネ文庫」での高坂の著作（第7編『実存哲学』、第31編『続実存哲学』、第81編『ニーチェ』）を吸収しつつ、より広い全体像としての「現代哲学」を提示しようとしている。230頁という量も、180円という価格も、「アテネ文庫」数冊分に該当するのであり、より体系化され、整備された著作といえる。

「アテネ新書」は、ゆるやかに編を連ねていき、10年後の昭和34（1959）年には、合計点数が100点を越えている。敗戦直後の本の絶対的な欠乏時期が過ぎれば、読者は、より充実した内容の本を求めるようになっていっただろう。また、執筆者たちも、経済的・時間的余裕が回復するに従って、より厚冊の本に、より体系化された内容を盛ることを望んだであろう。そのようにして、弘文堂書房の事業の中心も変化していったと想像される。

もう1つは、弘文堂書房の内紛についてである。

先の臼井史朗のインタビューでの記事を、ふたたび引用しておく。

昭和二十一年の公職追放で弘文堂の八坂社長も職を追われてしまっていて、その後の弘文堂は営業は東京で久保井理津雄氏、編集が西谷能雄氏、京都では関根氏、大洞氏などが中心になって運営がなされていたわけです。（中略）ところが、昭和二十五年に公職追放が解けて社長が帰ってくるんです。当時、どこの業界でも同じだったと思うんですが、元社長と現に経営してきた社員との関係はうまく戻るわけではなく、いろいろな確執があって、結局弘文堂は分裂してしまうわけです。

「アテネ文庫」と「アテネ新書」は、この時の「分裂」は乗り越えて続刊を続けたのであるが、先に引用した『京都出版史』の記事には、「昭和41年12月、経営に破綻をきたして弘文堂新社を設立」とある。その後の弘文堂書房の進路にも、波風が荒く立ちは大かっていたことが知られる。

2 ジャンル・内容の分類とその変化

創刊時の15点について

「アテネ文庫」は、その奥付に従えば、昭和23年3月25日に創刊され、同時に15点が刊行されている。その最初の15編の著者名・書名と内容・形式を列記してみよう。

(編数)	(著者名)	(書名)	(内容・形式)
第1編	久松真一	茶の精神	日本思想史・講演集
第2編	寿岳文章	河上肇博士のこと	河上肇についての回想的評伝
第3編	深田康算	美しき魂	美学評論と人物論・選文集
第4編	西田静子ほか	わが父西田幾多郎	西田幾多郎についての回想
第5編	木村素衛	花と死と運命	故人の日記の抄録・日記
第6編	青木正児	抱樽酒話	酒についての蘊蓄・随筆
第7編	高坂正顕	実存哲学	西洋の現代哲学・哲学評論
第8編	ヨハネス・ラウレス	きりしたん大名	日本史研究・人物伝集
第9編	織田作之助	朝	文学作品・戯曲
第10編	下村寅太郎	科学以前	西洋思想史・評論
第11編	幸徳秋水	社会主義神髄	政治思想・評論
第12編	高木惣吉	終戦覚書	事実報告・ドキュメント
第13編	山本安英	歩いてきた道	女優としての自伝的回想録
第14編	キエルケゴール	野の百合・空の鳥	哲学的宗教的断章・翻訳
第15編	川端康成	私の伊豆	伊豆についての文学的紀行文集

奥付の日付が事実在即していたとすれば、昭和23年3月25日の書店の店頭に、こんな15冊が、同じデザインで色だけ違う小冊として並んだことになる。実際にどれだけの数の書店でそれが実現したかはともかく、少なくとも、15点の小冊が、空だった書物台を満たし、争って買い求められたことは確かだろう。この15編を見てみただけで、当初の「アテネ文庫」の内容が多岐にわたり、形式がさまざまであることは明らかだろう。文学作品もあれば、本格的な哲学研究もある。故人についての回想や日記の抄録というプライベート性の一方に、「終戦」のドキュメントや思想的な提唱論文というパブリック性も目につく。また、肩のこらないエッセイと肘を張った評論とが並ぶ。この多様性、言い方を換えれば、不統一・未分化が、初期のこの叢書の様相である。

以下、301点の内容と形式を、この多様性に即して分類しながら、それが10年あまりの期間の中で、大きく変化し、定型化されていく様子を見ていきたい。

まず、全体を、「評論・エッセイに類するもの」(I)、「文学作品・創作に類するもの」(II)、「その他」(III)に3分類する。そして、301点の大部分をしめる「評論・エッセイに類するもの」(I)については、さらに、「一定の問題やテーマについて述べたもの」(A)、「自分について、自分の体験について述べたもの」(B)、「他人について、歴史的人物について述べたもの」(C)いう3つに分類して見ていきたい。分類の基準には偏りがあり整合的ではないが、このような区分がもっとも実態に即していると考えられる。

I 評論・エッセイに類するもの

A 一定の問題やテーマについて述べたもの……評論・エッセイ・入門書・解説書等

この分類に入るものは、その数が多いだけでなく、特に初期の叢書においては、さまざまな形態と内容が混在している。例えば、第1編の久松真一『茶の精神』は、「茶道文化の性格」「わびの茶道」という二つの文章からなる。茶道文化の特色が解説され、禅とのかかわりが述べられているのだが、前者は講

演の概略ないし要旨であり、後者は講演の筆記と質疑の記録である。つまり、内容的には評論であるが、文体的にはまだ評論になりきっていない、思想のエッセンスを並べたものといえる。第3編の深田康算『美しき魂』は、5つの文章と「著者略歴」からなるが、1篇は師ケーベルの追想、3篇は随想風の断章、残る1篇がより本格的な思考の軌跡をたどる評論であり、既に没後20年になる深田の多種多様な文章を集めて、多角的に深田を示そうとしたアンソロジーであるといえる。

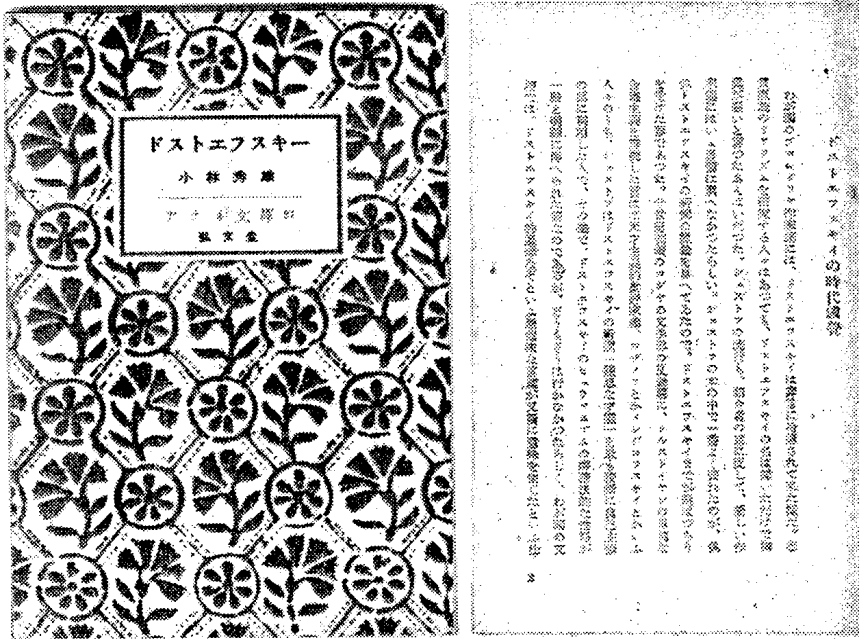
第6編の青木正児『抱樽酒話』は、酒についての話題を中国と日本の文献上で渉猟した、青木の博覧強記ぶりを遺憾なく発揮したエッセイであり、肩の凝らない内容である。一方、第7編の高坂正顕『実存哲学』は、「実存」と実存主義哲学を問う本格的な哲学研究であり、「実存概念の史的背景」「キェルケゴールに於ける実存の問題」「ハイデッガーに於ける実存の解釈学」の3章からなり、現代哲学に必死に挑もうとする意気込みがうかがえる。また、第10編の下村寅太郎『科学以前』も、既発表のものであるが、熱気のこもった2編の研究論文を合わせたものである。「あとがき」に「この近年、近代科学の形而上学的起源といふやうな問題を考へてゐる中にできて来たノートである」と記されており、これも、組織化され体系化される前の思考のエッセンスを集めたアンソロジーと認められる。

「アテネ文庫」には、この「I」の「A」という分類に属するものがもっとも多い。そして、前半期の叢書には、第3編の深田康算『美しき魂』や第10編の下村寅太郎『科学以前』のような、その著者のエッセンスを集めたアンソロジーの類が多く認められる。第6編の青木正児『抱樽酒話』のような純然たるエッセイは、意外なほど少ない。エッセイとしては、ほかには、同じ青木の第132編『酒の肴』があり、第138編の庄司浅水『世界の古本屋』もその例として挙げられるが、このような肩の凝らないエッセイは、この叢書においては、前半期・後半期を通じて稀である。敗戦直後という状況が、肩の凝らないエッセイを書く余裕や読む余裕を失わせていたのかもしれない。しかし、一方で、第7編の高坂正顕『実存哲学』のような本格的で体系的な研究ないし評論もまた

数少ない。高坂は、第31編の『続実存哲学』を書き足して、第7編の取り組みを続け、さらに、第81編の『ニイチェ』を書き継いで、より組織化され、体系化された哲学を完成させようと努めているが、この叢書を、そのような本格的な評論の場としている例は、ほかにはほとんど見出せない。

さらにいくつかの例を挙げて見ていきたい。

第27編の小林秀雄『ドストエフスキー』は、「ドストエフスキイの時代感覚」「未成年」の独創性に就いて」の既発表の2篇からなるが、巻末に添えられた「後記」には、「ドストエフスキイの作品に関しては、若い頃から興味を持ち、沢山書いて、その都度雑誌に発表して来た。それを纏めて本にする事を、西谷君からすすめられたが、みなノオトの様なもので纏った考へを書いたものでもなし、又新に書かうと思つてゐるので、お断りしたのだが、その一部でもとい



第27編 小林秀雄『ドストエフスキー』表紙と本文最初の頁

ふ同君の強つての言葉なので、不本意乍ら、二篇を選んで出してもらふ事にした。(中略)併し筆者としては、今後書くもの、方を読んで欲しいと思つてゐる」とあり、やはり、体系化される前のアンソロジーであったことが知られる。

第34篇の柳田謙十郎『宗教者の生活』は、「宗教的生活」を論じた評論であるが、それを研究対象としつつ、「宗教者の生活」に傾いていく自身の心境を述べている。「あとがき」には「今まで二十年以上も哲学の道を歩みつづけてくるしんで来はしたが、自分が真実に求めていたものは、決して学問の論理というようなものではなく、もつと全人格的な生命の真理ともいふべきものでな

ければならないことが自覚されて来た」とあり、「求道心のみは日に日に高まって行く」と記し、さらに、「目下執筆中の近著「宗教的世界」を併読していただければ幸甚である」と述べている。これもやはり、思想としてまとまる以前の思索の集積であることが知られ、「目下執筆中の近著」こそが体系化され整備された著作になる予定で、この叢書の本は、いわば草稿であり、「ノート」であったことになる。

これらの本からは、それぞれの執筆者たちが新しい時代の中で再出発しようとする意気込みと、まだ道が定まり切らないという迷いや心のゆれがうかがわれる。

そのように、前半期の「アテネ文庫」には、体系化される以前の、エッセンスを集めたアンソロジーが多く認められる。本格的な評論が多くならなかった理由として、第1に、60頁ないし80頁という容量の限界性が考えられる。体系化され、組織化された研究や思想を盛るためには、この器では小さすぎる。エッセンスを抽出して、いくつか並べておくことは、むしろ良心的な対処方法であったといえる。そして、理由の第2としては、時間的な、あるいは时期的な問題を挙げておくべきだろう。出版社からの執筆依頼を承諾したとしても、敗戦後2年という時期と時間の中で、どれだけまとまった仕事ができただろうか。おそらくほとんどの執筆者において、先に片づけなければならない現実的な問題が山積していただろうし、何よりも、この新しい時代がどこに向っているのか、自分はどう進めばいいのかという、見とおしや決意がつきかねている状態であっただろう。それゆえ、前半期の叢書には、未完成な文章が未整理のままに並ぶことが多くなったと考えられる。

しかし、エッセンスを抽出したアンソロジーは、内容の濃さという点では体系化された著作に劣らない。密度という点では、むしろ優る場合もあるだろう。従って、量的な制限と時間的な制約から、執筆者たちの多くがその形を選んでいくとき、文庫は、まだ磨かれていない小さな原石を並べていくような輝きと魅力を備えることになる。そこに、「最も簡素なる小冊の中に最も豊かなる生命を充溢せしめんことを念願する」という「アテネ文庫刊行のことば」が、実

現されていくことになる。

同時に、執筆者たちが見通しのつかない新時代に直面している様子——つまり彼らの視野にはこれまでとは異なる新しいものが入ってきているのだが、これからの自分の進路がまだ定まっていない様子——がうかがえ、同時代の人間として共有する迷いや苦しみが何冊もの本から確認されていくとき、そこに、同じ時代状況を生きる共通性の輪がつながれていくことになる。執筆者が強い信念に支えられた思想や行動を唱えるのではなく、むしろ迷いやゆれを見せ、著作が、光を宿しつつもまだ磨かれていない原石として並んでいくとき、読者は、そこから知識を得、真理を学ぶ以上に、自分たちの生きている時代の姿を捉えることができる。読者は、執筆者たちが指し示す方向に光を見、希望や期待を覚えるだけでなく、むしろ、執筆者たちの迷いや未完成の姿に自身の姿を重ね合わせ、共感を覚えていったと考えられる。

そのようにして生み出される、密度の高い輝きと未完成ゆえの共感が、当初の「アテネ文庫」の魅力であったのではないだろうか。

しかし、そのことを逆にたどれば、魅力は必然的にうつろっていくべきものになってくる。エッセンスをエッセンスのままに投げ出すという未熟なやり方が「不本意乍ら」なされるのは、執筆者たちがまだ自身の著作を磨き上げるための環境や余裕を整えていないからである。敗戦後の混乱が次第に沈静化していけば、執筆者たちはそれを手に入れていく。そして、十分な環境と余裕が得られれば、執筆者たちは、当然のこととして、体系化され整備された大著をめざすであろうし、それが完成されれば、迷いやゆれが読者の前に露呈されることもなくなっていくだろう。そうなれば、「アテネ文庫」の魅力は消え去ってしまうことになる。前述のような魅力は、限られた時間と状況の中でしか継続されないものではなかったか。

実際に、後半期の「アテネ文庫」では、未分化の混沌も未熟な輝きも少なくなっていく。エッセンスを並べたアンソロジーはほとんど消滅し、それに代わって、入門書・概説書・解説書が並んでくる。1冊1冊の本が明確なテーマや課題を持つようになり、それについての未完成な思考や深遠な論述を展開する

のではなく、60頁にあるいは80頁に収まる解説を提出するものとなる。このようなカオスからコスモスへの変化が、「アテネ文庫」の10年あまりの間における変化の大筋であるといえる。

この叢書には、表題に「入門」という語のつけられたものが多い。そのいくつかを見ていこう。まず、第66編の高山岩男『哲学入門』は、「哲学と日常的現実（日常）」「理想主義の哲学（理性）」「汎神論の哲学（精神）」「実存主義の哲学（実存）」の4章からなり、「日常」「理性」「精神」「実存」についての思考を展開している。従って、表題は「入門」と称しつつ、内容的には「哲学概論」と見ることができる。しかし、第82編の中島健蔵『フランス文学入門』は、単なるフランス文学史概説である。序文にも、「時々、小さな読書グループなどに呼ばれて、短い時間でフランス文学の歴史を話してくれと頼まれることがある。そういう時の心覚えのノートに少し手を加えたのが、これである」と記しているように、フランス文学に向って問いかけがなされているのではなく、フランス文学の独自性や特質が論じられているのではない。フランスの「文学史の骨組み」が記述されているだけで、知識のみを伝える、コンパクトな入門書、手引書という内容である。このコンパクトな入門書というパターンが、後半期の「アテネ文庫」の定型となっていく。

第95編の原光雄『自然弁証法入門』の「まえがき」には、次のようにある。

本書は、自然弁証法（すなわち唯物論的で弁証法的な自然観）のごく基本的なことから、できるかぎりわかりやすく書いたものである。新制高校の生徒諸君や労働者諸君にもよんでもらうことを念頭において書いたが、ふゆきとどきの箇所が多いのではないかと恐れている。

本書より以上にすゝんで勉強をされる方々は、著者の別の著書『自然弁証法』（日本科学社刊）を一読されたいと思う。さらにすゝんで勉強される方々は、エンゲルス遺稿『自然弁証法』の拙訳（三一書房刊）をよんでいたゞきたいと思う。

この本は初級者向けの入門書であり、中級者編、上級者編は別に用意されている。そういう段階性・限界性が執筆者に明確に意識されている。この本の発

行年月は昭和24年12月であるが、その前月に、先に見た「アテネ新書」の刊行が始まっている。弘文堂書房においては、「アテネ新書」が中級者編に相当していたといえる。出版をめぐる状況は急速に変化していく。敗戦後の本の欠乏状況は1年ごとに解消され、より内容の整った本がより多く流布するようになる。執筆者の側にも余裕が回復していき、新しい時代についての見通しも、自分の進路についての決心も定まり始める。さらに、若い世代の執筆者たちが登場し始める。世の中全体が、カオスからコスモスへと急速に変容をとげつつあったのである。

この『自然弁証法入門』のように、明確なテーマと限定された守備範囲を持ち、かつ公言していること、誰に読んでほしいか、誰を読者と想定して書いているのかが明示されていること、それらは本としてはあるべき姿であり、執筆態度としても誠実である。書く側も読む側も、受け渡しされる内容や価値について、明確な意識を持つことができるのであり、誇大さや嘘に煩わされることはなくなる。初期のような混沌とした熱気や意気込みには、妄想やごまかしが混入している危険性があった。定型化されていくメリットは大きく、こういう時点からこそ、清新で若々しい叢書がスタートするというべきかもしれない。ただ、そこには、失われるものもあり、見落とされかねない陥穽もある。

例えば、昭和25年2月15日に刊行された、第98編の白井俊明『ノーベル賞』は、前年11月3日の湯川秀樹のノーベル賞受賞の発表を受けて出版されている。内容は、「ノーベルの生涯」「ノーベル賞の制定」「今世紀に於ける理論物理学の発展」「ノーベル賞受賞者総表」の4章からなり、読者の知りたいという欲求に答える、時宜に適した、コンパクトな入門書となっている。そこに、読者の好奇心、時代のニーズというものが、続刊の企画を決定する重要な要因となり始めている姿を捉えることができる。もはや、「どぶろく会議」で企画が相談される時代は過ぎ去っていたといえる。初期の「アテネ文庫」にあっては、書くべき内容は、より多く執筆者の内部に向って問われていたが、次第に、内部への問いは不必要になり、執筆者たちは、外からの要請を受けて、与えられた課題に応えようとして書くようになっていく。「アテネ文庫」には「アテネ

「文庫」の守備範囲が定められ、「アテネ新書」の守備範囲との役割分担が明確化されていく。それぞれの企画や本がきちんと階層づけられるような、秩序だった出版が通例となっていく。

そのようにして、「アテネ文庫」の後半期には入門書が多くなる。第105編の梅本克巳『唯物論入門』、第140編の西尾実『国文学入門』、第165編の大山定一『ファウスト入門』、第176編の吉川幸次郎『中国文学入門』、第191編の土屋文明『万葉集入門』、第197編の仁戸田六三郎『論理学入門』、第200編の中村哲『憲法入門』、第255編の渡辺護『歌劇入門』などである。

また、「古典解説シリーズ」、「世界歴史シリーズ」、「日本歴史シリーズ」、「音楽鑑賞手帖シリーズ」というシリーズものが始まり、続刊のほとんどがシリーズもので満たされていく。シリーズものは明確なテーマと守備範囲を持つ解説書であり、入門書と相似的である。

その1つである「世界歴史シリーズ」は、第238編から始まり、合計22点を数える。その著者名と書名を列記しておこう。

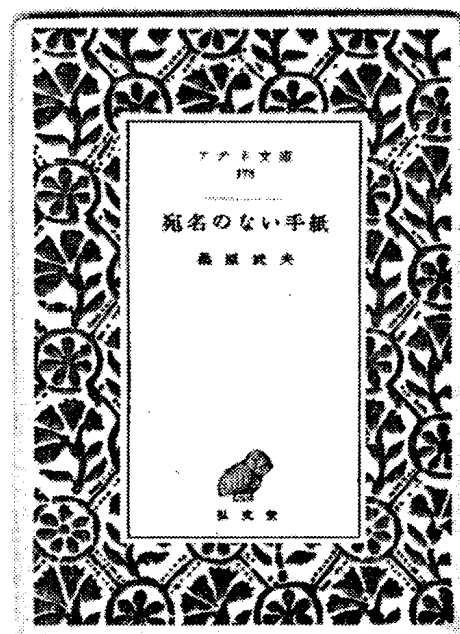
(著者名)	(書名)	(編数)	(著者名)	(書名)	(編数)
①松田寿男	『中央アジア史』	238	⑫蒲生礼一	『イラン文化』	274
②伊瀬仙太郎	『東西文化の交流』	239	⑬小林栄三郎	『ヴェルサイユ体制』	276
③増田重光	『ルネサンス』	240	⑭増井経夫	『アヘン戦争と太平天国』	282
④松本平治	『イギリス憲政史』	241	⑮藤田重行	『中世ヨーロッパ』	284
⑤角田文衛	『原始社会』	243	⑯豊田堯	『フランス革命』	286
⑥波多野乾一	『中国の国民党と共産党』	244	⑰島田正郎	『遼の社会と文化』	288
⑦中屋健一	『アメリカ独立革命』	245	⑱藤田重行	『産業革命』	289
⑧山岸義夫	『南北戦争』	246	⑲半田元夫	『宗教改革史』	292
⑨中村元	『インドの古代社会』	263	⑳中屋健一	『ニュー・デール』	293
⑩鎌田重雄	『漢代の社会』	266	㉑半田元夫	『キリスト教史』	298
⑪前島信次	『サラセン文化』	267	㉒矢田俊隆	『三月革命』	299

「日本歴史シリーズ」は、第250編から始まり、合計8点である。

(著者名)	(書名)	(編数)	(著者名)	(書名)	(編数)
①宮城栄昌	『律令制度の社会と文化』	250	⑤坂本太郎	『古代日本の交通』	272
②肥後和男	『神話・伝承と古代文化』	251	⑥伊東多三郎	『幕藩体制』	277
③樋口清之	『日本原始文化』	268	⑦津田秀夫	『江戸時代の三大改革』	279
④福地重孝	『明治社会史』	271	⑧芳賀幸四郎	『中世日本の形成』	285

「アテネ文庫」の第200編あたりから後は、入門書やシリーズもの以外のスタイルや内容を持つものがほとんどなくなってしまう。未分化のものが混在し、未熟でありつつ輝きを抱いている混沌は、急速に影を消し、初心者・一般人を意識した、啓蒙的でコンパクトな入門書に向って、極端なほどに定型化されていくことになる。

消え去っていくものの方、エッセンスを抽出したアンソロジーの例を、なおいくつか補っておこう。第91編の天野貞佑『人間の哀しみ』、第93編の幸徳秋水『東京の木賃宿』、第97編の長与善郎『人間の探求』、第178編の桑原武夫『宛名のない手紙』、第189編の清沢満之『わが信念』などがそれに該当すると考えられる。



第178編 桑原武夫
『宛名のない手紙』表紙

B 自分について、自分の体験について述べたもの……日記・体験記・ドキュメント・自伝等

「アテネ文庫」には、全体を通じて、自伝と呼べるものはきわめて少ない。第13編の山本安英『歩いてきた道』が挙げられる程度である。これは一貫した編集方針であったのか、また、何らかの理由があったのか、いまのところ明ら

かではない。

それに近いものとして、前半期の叢書には、故人の日記の抄録というスタイルのものがある。第5編の木村素衛『花と死と運命』、第37編の西田幾多郎『寸心日記』、第48編木村素衛『紅い実と青い実』、第64編の玉林憲義・久山康訳『キェルケゴールの日記』、また、第189編の清沢満之『わが信念』にも「日記抄」が収録されている。これらはすべて故人の日記を編者が抄録したものであり、その編者の存在を重く捉えるならば、次項（C）に含めるべきものという見方もできる。前章で、思想のエッセンスのアンソロジーという言い方をしたが、編者たちは、日記の中に、故人の思想や思考のエッセンスを見出し、それをちりばめたようなスタイルを試みたと考えられる。

この日記の抄録というスタイルは、後半期の叢書にはまったく見られなくなる。前項（A）で見た変化と同様に、聞き手を明確に想定していないような、独白的で未完結な思索の展開は、この叢書の内容としてふさわしいものではなくていくのである。

自分の体験を記録として提示したもののものは、前半期にはいくつも見うけられる。第28編の小竹文夫『上海三十年』は、「上海三十年一序に代へて一」と「支那人の生き方」からなりたっているように、自身の体験を通して見た中国人の特質を、帰納し客観化した形で叙述している。第32編の丸山政男『ソヴェートの市民生活』も、体験記というよりはレポートの要素が強い。一方、第43編の足利惇氏『ペルシアの旅』は、日記のスタイルを採り、自分の体験がそのまま語られる旅行記であり、主観性がより強い。第90編の恒川真『アメリカの市民生活』は、自分の体験から得、まとめた知識の提示という形を取り、対象の紹介の方に重心が置かれている。一方、第126編の湯浅年子『パリ随想』は、自分の体験を語り、自分の得た感想の方に重心が置かれている。より客観に就こうとするか、より主観にとどまろうとするか、その立場はさまざまだが、敗戦後の日本とはかけ離れた世界の開示に、読者は大きな興味を感じただろう。

このような海外体験記や紹介記は、後半期にはまったく見出せなくなり、このおもしろさも削り取られていく。後半期のタイトルを眺めていくと、一見、

文学・日本史・世界史・音楽などにわたって、多彩なテーマが並んでいるように見えて、実は、いきいきとした体験からくるおもしろさや新鮮な驚きは消えているのであり、多彩なテーマといっても、平板な多彩さであったことに気づかされる。

さらに、鮮明な印象を持つ2つの例を挙げておきたい。1つは、第99編の荒畑寒村『共産党をめぐる人々』であり、これは体験記としての要素と歴史叙述という要素とをあわせ持つものである。もう1つは、第12編の高木惣吉『終戦覚書』、第100編の小柳富次『レイテ沖海戦』、第123編の下村海南『八・一五事件』などの、戦争にかかわっての当事者の語るドキュメントである。これも、体験記としての要素と歴史叙述としての要素をあわせ持つという意味では、第99編の『共産党をめぐる人々』との共通性が指摘できるだろう。

戦争中の「京都学派」と海軍とのかかわりはよく知られているが^(注9)、高木惣吉はその代表的人物であり、このような著作も、あの「ネットワーク」から生まれたものである。しかし、こういうなまなましいドキュメントも、後半期の叢書には見出せなくなるのである。

C 他人について、歴史的人物について述べたもの……回想・人物論・評伝等

初期の叢書においては、第2編の寿岳文章『河上肇博士のこと』、第4編の西田静子・上田弥生『わが父西田幾多郎』の印象が鮮烈である。弘文堂書房にとっても重要であった、今は亡き2つの巨星が、親しい者の目を通して語られていく。このような親しい者の語る人物伝は、前半期の叢書には少なくない。第16編の和辻哲郎『ケーベル先生』、第23編の宇田道隆『寺田寅彦』、第33編の有馬頼寧『友人近衛』、第139編の宇田道隆『寺田寅彦との対話』、第166編の小宮豊隆『知られざる漱石』などがある。

執筆者が対象との間にとろうとする距離や姿勢はさまざまに異なり、より客観視しようとする者、主観に偏る者、立場はさまざまであるが、そのゆれ動く幅に示されるように、対象となる人物へのなまなましい印象や感情を背負っていることは共通している。

第41編の小泉信三『福沢諭吉』の序文には、次のようにある。

本書の前二章は個人的追懐を交へつゝ、福沢諭吉の事を記し、後の二章は歴史的人物として、純客観的にその著作思想を論じたつもりである。同じ人を、章に由て或は先生と称し、或は名を以て呼ぶのは不統一の嫌ひもあるが、右の理由から構はずにそれをした。

この「不統一」が自他ともに許容されている状態は、いつから、またなぜ消滅していったのだろうか。「個人的追懐を交へつゝ」語られる像と、「純客観的に」という姿勢で語られる像との混在は、むしろ魅力的なものではなかつたのだろうか。正確で客観的な人物像への統一を求めて、なまなましい印象や感情を背負って書くことの魅力やおもしろさを捨てていった経緯は、「アテネ文庫」の問題の守備範囲を越えるものというべきかもしれない。しかし、戦後の混乱期からの脱出の課程で、日本人は多くのものを気づかないうちに捨ててしまっていたのではないだろうか。カオスがコスモスに変わっていくとき、得られたものと失ったものとはそれぞれに大きい。第三部の「各点解説」において考えてみたいことの1つは、そのような問題なのである。

第50編の小島祐馬『中江兆民』あたりから、評伝というべきものが始まる。評伝とは、ここでは、過去の人物に対する研究としての人物伝を指している。ただ、小島は、「その嗣子丑吉君」と「相識の間柄となり、爾来二十数年間親交を保つた」と記しており、その子を通して、対象に流れる親近感が存在している。より距離の安定した評伝として、第52編の植田寿蔵『ミレエ』、第157編の北森嘉蔵『マルティン・ルター』、第175編の矢内原伊作『抵抗詩人アラゴン』、第196編の井筒俊彦『マホメット』などが数えられる。

ところが、回想的な人物伝も、評伝も、ともに次第に減少し、第200編以降では、「音楽鑑賞手帖」のシリーズの中に、第256編の木村重雄『モーツァルト』、第257編の門馬直美『ブラームス』、第269編の渡鏡子『シューマン』、第287編の野村光一『ショパン』などの音楽家の評伝ないし紹介があるにとどまる。こ

こでも、多様性は切り捨てられて、平板な定型化が進行していく。

以上、「評論・エッセイに類するもの」として見て来た「A」「B」「C」のすべての項目を通して、初期の混沌とした熱気や、前半期の不統一の中にあった多様性が、後半期では消え去っていき、定型化された教養書が続刊のほとんどを埋めつくしていく様を確認してきた。変化によって得たものより、失ったものの方に注目した叙述になってしまったが、それは、「アテネ文庫」が10年あまりで燃え尽き、支持を失い、やがて忘れ去られる原因の一端が、この変化にあると考えるからである。そして、この変化は、「アテネ文庫」だけのものではなく、時代の変化として、より根深く現代につながってくるのではないだろうか。^(注10) 失ったものの大きさに注目することで、そのような問題提起としておきたいと思う。

Ⅱ 文学作品・創作に類するもの

この叢書が文学作品として生み出した成果は大きくはない。それでも、前半期の叢書には、文学作品として、第9編の織田作之助『朝』（戯曲）、第21編の池谷信三郎『マグダレナ』（小説）、第54編の壺井栄『たからの宿』（小説）、第131編の木下順二『夕鶴』（戯曲）があり、紀行文として、第15編の川端康成『私の伊豆』がある。しかし、後半期の叢書には、第162編の日夏耿之介『近代日本詩集』と、第220編の『石川啄木詩集』から第228編の『ひろし・ぬやま詩集』までの9点の詩選集が並ぶだけで、それ以外に文学作品と呼べるものはない。10点という詩選集の量を評価するとしても、多様性の切捨てと定型化は明らかだろう。これも、先に見たと同様の変化として見ておきたい。

文学作品という範疇を広く捉えた場合、なお、2種類の文学にかかわる評論・研究の活動ないし模索に触れておく必要がある。

その1つは、いわゆる文芸評論家たちの活動である。唐木順三は、第117編の『自殺について』と第160編の『近代日本文学』において、幅広い視野と守備範囲の中で、自身の評論活動の地平を試みている。先に触れた、第27編の小林秀雄『ドストエフスキー』や、第164編の中村光夫『小説入門』での模索も、

また、第183編の中野重治『啄木』も、それぞれの執筆者の敗戦直後の姿として注目される。これらについては、改めて、第三部の「各点解説」の項で見たい。

他の1つは、研究としての文学との取り組みである。

日本の古典文学の研究は、第137編の早坂礼吾『源氏物語』、第140編の西尾実『国文学入門』、第171編の久松潜一『日本文学辞典』、第191編の土屋文明『万葉集入門』などがまず散発的に刊行される。それが好評であったのか、第230編の井本農一『奥の細道』以下は「古典解説シリーズ」と銘打って、合計22点が続々と刊行されていく。その著者名と書名を挙げておこう。

(著者名)	(書名)	(編数)	(著者名)	(書名)	(編数)
①井本農一	『奥の細道』	230	⑫田中允	『世阿弥』	252
②斎藤清衛	『徒然草』	231	⑬池田亀鑑	『枕草子』	253
③関みさを	『更級日記』	232	⑭窪田章一郎	『古今集』	260
④冨倉徳次郎	『方丈記』	233	⑮松尾聰	『伊勢物語』	261
⑤久松潜一	『新古今集』	234	⑯中村直勝	『増鏡』	262
⑥松村博司	『紫式部日記』	236	⑰守随憲治	『近松』	265
⑦河竹繁俊	『黙阿弥』	237	⑱松浦貞俊	『日本靈異記』	273
⑧倉野謙司	『古事記』	242	⑲栗山理一	『蕪村』	275
⑨清水泰	『堤中納言物語』	247	⑳秋山虔	『蜻蛉日記』	278
⑩麻生磯次	『馬琴』	248	㉑重友毅	『雨月物語』	280
⑪井上豊	『玉葉と風雅』	249	㉒関克己	『良寛』	281

これだけ充実した古典の入門書の整列は注目される。執筆者としては、戦後の若い世代の研究者の名も多く、コンパクトな入門書が若々しい熱意によって深い内容を持ち得ている例も多い。この点については、シリーズという定型化によってこの成果が得られているのであり、ここでは、定型化されたことのメリットに着目しておきたい。戦後の古典文学研究のはじまりをここに見ること

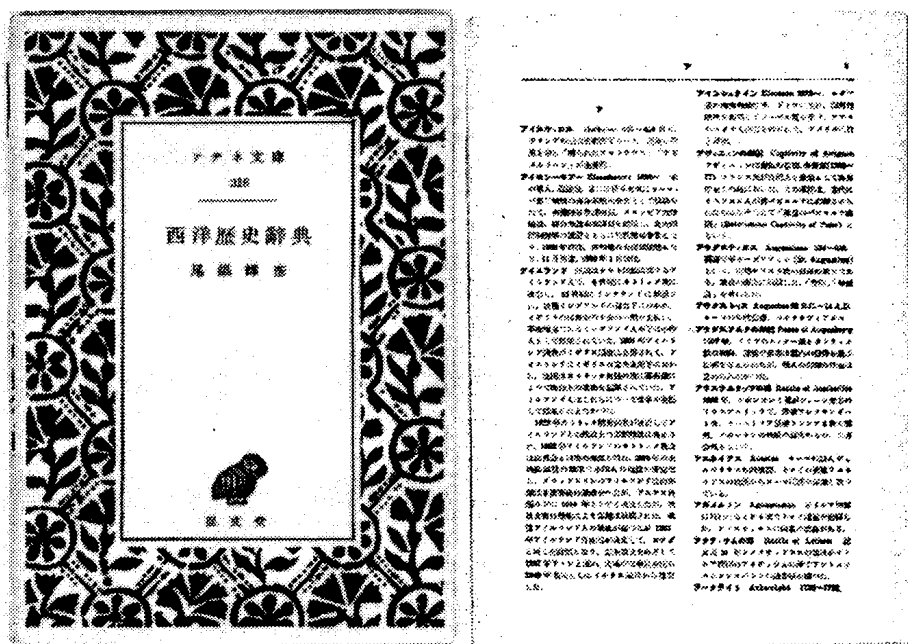
もできるだろう。

外国文学の研究としては、第27編の小林秀雄『ドストエフスキー』、第42編の大山定一訳編『知られざるゲーテ』、第82編の中島健蔵『フランス文学入門』、第136編の高安国世訳編『ハイネ 愛の詩集』、第148編の大山定一訳編『ドイツ愛唱歌集』、第168編の深瀬基寛『現代の英文学』、第176編の吉川幸次郎『中国文学入門』、第179編の谷友幸『リルケ』、第195編の魚返善雄『日本文学と中国文学』などがある。

III その他

最後に、「I」と「II」で触れなかった2つのスタイルについて、簡単に見ておきたい。

その1つは、「座談会」というスタイルである。「座談会」は広く行われているが、この叢書にも、第25編の『科学と宗教』、第46編の『実存と虚無と頽廢』、第60編の『物質とはなにか』、第70編の『生命とは何か』、第75編の『安定恐慌』があるが、後半期の叢書にはまったく見られなくなる。これは、多様性の減少の1つとして数えられる。



第216編 尾鍋輝彦『西洋歴史辞典』表紙と本文最初の頁

逆に、後半期に集中して登場する「小辞典」というスタイルがある。この叢書独特の特徴的なスタイルとなっており、31点が数えられる。この小辞典という形態は先の入門書の一変形と捉

えられるが、1冊1冊の小辞典に、その分野の数多くの用語が採取されている。

後半期のこの叢書が生み出した最大の収穫は、この言葉の量であり、定義・解説の集積であると思われる。この言葉の質量については、大正期以来戦前まで続いてきた学術の進歩と流布の活動と切り離しては考えられない。今はそのための十分な準備がないので、他日を期することとしたい。ここでは、小辞典の編者名と書名を列記するにとどめる。

(編者名)	(書名)	(編数)	(編者名)	(書名)	(編数)
①高山岩男	『哲学用語辞典』	115	①⑦羽仁説子	『家庭科辞典』	206
②田村松平	『科学人名辞典』	147	①⑧小竹文夫	『東洋歴史辞典』	207
③諸井三郎	『音楽辞典』	152	①⑨相良守次	『心理学辞典』	209
④矢島祐利ほか	『科学用語辞典』	153	②⑩金原寿郎ほか	『物理学辞典』	214
⑤相原信作	『哲学人名辞典』	155	②⑪白井俊明	『化学辞典』	215
⑥平野義太郎	『アジア問題辞典』	156	②⑫尾鍋輝彦	『西洋歴史辞典』	216
⑦久松潜一	『日本文学辞典』	171	②⑬木内信蔵	『人文地理辞典』	217
⑧山谷省吾	『新約聖書辞典』	172	②⑭箒見恒夫	『映画作品辞典』	218
⑨和歌森太郎	『日本歴史辞典』	181	②⑮吉田洋一	『初等数学辞典』	219
⑩石上良平	『社会科学用語辞典』	190	②⑯あらかわそおべい	『外来語辞典』	235
⑪河盛好蔵	『文芸用語辞典』	191	②⑰久松潜一	『万葉集辞典』	264
⑫湯浅明	『生物用語辞典』	201	②⑱田辺秀雄	『事典 音楽通論』	254
⑬吉田洋一	『数学辞典』	202	②⑲田中千禾夫	『新劇辞典』	270
⑭戒能通孝	『法律学辞典』	203	②⑳時野谷勝	『日本名著辞典』	283
⑮岡田謙	『一般社会科辞典』	204	③⑰阪倉篤義	『日本文法辞典』	290
⑯三野与吉	『地学辞典』	205			

注

(1) 紀田順一郎・谷口雅男『ニッポン文庫大全』(1997. 11、ダイヤモンド社)。

(2) たとえば、「岩波新書」が、戦前・戦中の「赤版」に代えて、戦後「青版」として

再出発するのは、昭和24（1949）年4月からである。「岩波新書」は、この年に24点を刊行、翌25年には29点の刊行、26年にも29点の刊行というペースで新刊書を市場に送り出していき、100点に達するのは昭和27年6月である。一方、「アテネ文庫」は、昭和23年に41点、24年に52点、25年に45点を刊行し、昭和25年2月には100点を越えており、その機先を制している。薄冊であり、内容については既発表の文章も多いが、戦後という状況を加味すれば、新刊書の刊行としては驚くべきハイスピードであったといえる。

- (3) 井狩春男編著『文庫中毒』、1992. 4、ブロンズ新社。
- (4) 奥村敏明『文庫パノラマ館』、2000. 10、青弓社。
- (5) 『京古本や往来』84号（1999. 4）、「京古本や往来インタビュー 白井史朗さんに聞く「アテネ文庫創刊のころ」」。
- (6) 京都出版史編纂委員会編『京都出版史 明治元年—昭和二十年』、1991. 3、日本書籍出版協会京都支部発行。
- (7) 『京都大学文学部五十年史』、1956. 11、京都大学文学部。
- (8) 辻村公一「序に代えて 高山岩男先生の思い出」（高山岩男『京都哲学の回想—旧師旧友の追憶とわが思索の軌跡—』、1995. 4、一燈園燈影舎（燈影撰書24）、所収）
- (9) 大橋良介『京都学派と日本海軍 新史料「大島メモ」をめぐる』（2001. 12、PHP研究所（PHP新書185））が、最新の研究成果を報告している。

海軍軍人の高木惣吉と西田幾多郎とのかかわりについて述べた一節を引用しておく。以下に見るように、高木は西田幾多郎の弟子ではなかった。ただ、新聞記者の眼に高木が西田の高弟と映っていたということは、ひとつの事実として受け止めてよいだろう。彼自身が西田を尊敬し、哲学書を読み（中略）、ついには西田を筆頭とする京都学派を、海軍のブレーン・トラストに招き入れた人物だったからだ。

- (10) 例えば、今年（2006年）10月に創刊された、朝日新聞社刊行の「朝日新書」の「創刊の辞」（朝日新書編集長 岩田一平）には次のようにあり、叢書が明確なテーマと限定された守備範囲を持つ教養書の集積をめざしていることが知られる。

……そんな、さまざまな“いま”を見つめ、わたしたちは朝日新書を創刊します。

だれもが幅広く「知」の世界を楽しめ、タイムリーで、わかりやすく、いつでもどこでも手軽に読める、もっとも新しい教養新書シリーズです。（中略）

政治、経済はいうに及ばず、文化、芸能、世相、趣味、スポーツなど、朝日新聞の一面から最終面までがそうであるように、あらゆるジャンルに挑戦します。

（『朝日新聞』、2006. 10. 15ほか）

「アテネ文庫」のたどった変化の道すじは、現代にまで受けつがれているといえるだろう。

第二部 全点目録

(「初版発行年月日」の欄に*のついているものは、初版未見である。)

巻数	書名	著者名	初版発行年月日
1	茶の精神	久松真一	1948 (S23). 3 .25
2	河上肇博士のこと	寿岳文章	1948 (S23). 3 .25
3	美しき魂	深田康算	1948 (S23). 3 .25
4	わが父西田幾多郎	西田静子ほか	1948 (S23). 3 .25
5	花と死と運命	木村素衛	1948 (S23). 3 .25
6	抱樽酒話	青木正児	1948 (S23). 3 .25
7	実存哲学	高坂正顕	1948 (S23). 3 .25
8	きりしたん大名	ヨハネス・ラウレス	1948 (S23). 3 .25
9	朝	織田作之助	1948 (S23). 3 .25
10	科学以前	下村寅太郎	1948 (S23). 3 .25
11	社会主義神髄	幸徳秋水	1948 (S23). 3 .25
12	終戦覚書	高木惣吉	1948 (S23). 3 .25
13	歩いてきた道	山本安英	1948 (S23). 3 .25
14	野の百合・空の鳥	キエルケゴール	1948 (S23). 3 .25
15	私の伊豆	川端康成	1948 (S23). 3 .25
16	ケーベル先生	和辻哲郎	1948 (S23). 5 .15
17	卒翁夜話	尾崎行雄	1948 (S23). 5 .15
18	童笛吹けども	室生犀星	1948 (S23). 5 .15
19	青年に与ふ	鈴木大拙	1948 (S23). 5 .15
20	平和の国デンマーク	大谷英一	1948 (S23). 5 .15
21	マグダレナ	池谷信三郎	1948 (S23). 7 .25
22	医学の階級性	安田徳太郎	1948 (S23). 7 .25

23	寺田寅吉	宇田道隆	1948 (S23). 7 .25
24	ヘラクレイトスの言葉	田中美知太郎訳	1948 (S23). 7 .25
25	科学と宗教	座談・仁科芳雄ほか	1948 (S23). 7 .25
26	荷風論	岡崎義恵	1948 (S23). 7 .25
27	ドストエフスキー	小林秀雄	1948 (S23). 9 .15
28	上海三十年	小竹文夫	1948 (S23). 9 .15
29	法隆寺	浅野清	1948 (S23). 9 .15
30	キリスト教と近代文化	ヨゼフ・ロゲンドルフ	1948 (S23). 9 .15
31	続実存哲学	高坂正顕	1948 (S23). 9 .15
32	ソヴェートの市民生活	丸山政男	1948 (S23).10.25
33	友人近衛	有馬頼寧	1948 (S23).10.25
34	宗教者の生活	柳田謙十郎	1948 (S23).10.25
35	酔歌	三土興三	1948 (S23).10.25
36	ベートーヴェンの面影	笹原忘人	1948 (S23).11.5
37	寸心日記	西田幾多郎	1948 (S23).11.30
38	一寸法師	石田英一郎	1948 (S23).11.30
39	愛は多くの罪を掩う	キェルケゴール	1948 (S23).11.30
40	日本の財閥	土屋喬雄	1948 (S23).11.30
41	福沢諭吉	小泉信三	1948 (S23).11.30
42	知られざるゲーテ	大山定一訳編	1949 (S24). 2 .10*
43	ペルシャの旅	足利惇氏	1949 (S24). 2 .15
44	無教会キリスト教	関根正雄	1949 (S24). 2 .15
45	レンブラント	ブルクハルト	1949 (S24). 2 .15
46	実存と虚無と頽廢	座談・和辻哲郎ほか	1949 (S24). 3 .15
47	この英国人 ウィリヤム・コベットの場合	寿岳文章	1949 (S24). 3 .15
48	紅い実と青い実	木村素衛	1949 (S24). 3 .15
49	続日本の財閥	土屋喬雄	1949 (S24). 3 .15

50	中江兆民	小島祐馬	1949 (S24) . 3 .15
51	英国労働党	木村健康	1949 (S24) . 3 .25
52	ミレエ	植田寿蔵	1949 (S24) . 3 .25
53	弁証法入門	高山岩男	1949 (S24) . 3 .25*
54	たからの宿	壺井栄	1949 (S24) . 3 .25
55	ショーペンハウエルの対話	相馬信作訳編	1949 (S24) . 3 .25
56	封建文化と近代文化	長谷川如是閑	1949 (S24) . 5 .15
57	ロシアの科学者	八杉龍一	1949 (S24) . 5 .15
58	モスクワ	丸山政男	1949 (S24) . 5 .15
59	アテナイ人の生活	高津春繁	1949 (S24) . 5 .15
60	物質とはなにか	座談・朝永振一郎ほか	1949 (S24) . 5 .15
61	神を探ねて	赤岩栄	1949 (S24) . 6 .15
62	スピノザの生涯	ルカス、コレルス	1949 (S24) . 6 .15
63	新聞	土屋清	1949 (S24) . 6 .15
64	キェルケゴールの日記	玉林憲義ほか訳	1949 (S24) . 6 .15*
65	原子科学の人々	藤岡由夫	1949 (S24) . 6 .15
66	哲学入門	高山岩男	1949 (S24) . 7 .25*
67	ソヴェトのちから	前芝確三	1949 (S24) . 7 .25
68	ベルヂェエフ	宮崎信彦	1949 (S24) . 7 .25
69	ジャーナリズム批判	鈴木文史朗	1949 (S24) . 7 .25
70	生命とは何か	座談・田宮博ほか	1949 (S24) . 7 .25
71	クロボトキン	森戸辰男	1949 (S24) . 8 .25
72	ファイヒテ 妻への手紙	相原信作訳編	1949 (S24) . 8 .25
73	今日の政党	岩淵辰雄	1949 (S24) . 8 .25
74	孫文から毛沢東へ	岩村三千夫	1949 (S24) . 8 .25
75	安定恐慌	座談・中山伊知郎ほか	1949 (S24) . 8 .25
76	独逸デモクラシーの悲劇	岡義武	1949 (S24) .10.5

77	デカルト エリザベトへの手紙	野田又夫訳編	1949 (S24).9.25
78	世界の科学・日本の科学	矢島祐利	1949 (S24).10.5
79	ロダン	深田康算	1949 (S24).9.25
80	カトリシズム	ロゲンドルフ	1949 (S24).10.25
81	ニーチェ	高坂正顕	1949 (S24).10.5*
82	フランス文学入門	中島健蔵	1949 (S24).10.25
83	プラトンの自叙伝	高田三郎訳編	1949 (S24).10.5
84	死刑論	木村亀二	1949 (S24).10.5
85	レーニンからスターリンへ	前芝確三	1949 (S24).9.25
86	ロシアの虚無主義	西谷啓治	1949 (S24).11.15
87	知識人の抗議	渡辺一夫	1949 (S24).11.20
88	日本人の政治家	山浦貫一	1949 (S24).12.25
89	科学のすすめ	ヘルムホルツ	1949 (S24).11.5
90	アメリカの市民生活	恒川真	1949 (S24).11.15
91	人間の哀しみ	天野貞佑	1949 (S24).11.15*
92	西田哲学	務台理作	1949 (S24).12.25*
93	東京の木賃宿	幸徳秋水	1949 (S24).12.25
94	新ヒューマニズム	ルネ グルツセ	1950 (S25).3.25
95	自然弁証法入門	原光雄	1949 (S24).12.25
96	社会科学への道	高島善哉	1950 (S25).2.15
97	人間の探求	長与善郎	1950 (S25).1.30
98	ノーベル賞	白井俊明	1950 (S25).2.15
99	共産党をめぐる人々	荒畑寒村	1950 (S25).2.15
100	レイテ沖海戦	小柳富次	1950 (S25).2.15
101	科学と技術	和辻春樹	1950 (S25).3.25
102	自由と独裁	ツワイク	1950 (S25).3.25
103	芸術とはなにか	井島勉	1950 (S25).3.25*

104	ブランキ主義とマルクス主義	対馬忠行	1950 (S25). 3 .25
105	唯物論入門	梅本克巳	1950 (S25). 3 .25
106	法律の階級性	戒能通孝	1950 (S25). 4 .25
107	地球は動く	柏木聞吉	1950 (S25). 4 .25
108	タバコの文化史	加茂儀一	1950 (S25). 4 .25
109	中国とソ連	具島兼三郎	1950 (S25). 4 .25
110	中小企業と日本経済	蜷川虎三	1950 (S25). 4 .25
111	デフレーション	宮田喜代蔵	1950 (S25). 7 .10
112	中国共産党	小島祐馬	1950 (S25). 7 .10
113	ミケルアンジェロ	木村素衛	1950 (S25). 7 .10
114	米ソ戦うか	宮崎正義	1950 (S25). 7 .10
115	哲学用語辞典	高山岩男	1950 (S25). 7 .20*
116	自由の体系	尾高朝雄	1950 (S25). 8 .10
117	自殺について	唐木順三	1950 (S25). 7 .30
118	現代の良心	柳田謙十郎	1950 (S25). 7 .30
119	ヒマラヤ登高史	藤木九三	1950 (S25). 7 .30
120	太平洋海戦史	小柳富次	1950 (S25). 7 .30*
121	犯罪の科学	古畑種基	1950 (S25). 8 .15
122	適度人口	美濃口時次郎	1950 (S25). 8 .10
123	八・一五事件	下村海南	1950 (S25). 8 .10
124	第四次元の芸術	谷川徹三	1950 (S25). 8 .10
125	スターリン主義批判	対馬忠行	1950 (S25). 8 .15
126	パリ随想	湯浅年子	1950 (S25). 9 .15
127	台風	大谷東平	1950 (S25). 9 .15
128	ファン・ホッホ	植田寿蔵	1950 (S25). 9 .15
129	イギリスの功利主義	塩尻公明	1950 (S25). 9 .15
130	社会思想史	猪木正道	1950 (S25). 9 .30*

131	夕鶴	木下順二	1950 (S25).10.15
132	酒の肴	青木正児	1950 (S25).10.15
133	西洋近世哲学史	野田又夫	1950 (S25).10.30*
134	百貨店	土屋好重	1950 (S25).9.15
135	デカルト	沢瀧久敬	1950 (S25).11.20
136	ハイネ 愛の詩集	高安国世訳編	1950 (S25).12.25
137	源氏物語	早坂礼吾	1950 (S25).12.25
138	世界の古本屋	庄司浅水	1950 (S25).12.25
139	寺田寅彦との対話	宇田道隆	1950 (S25).12.25
140	国文学入門	西尾実	1951 (S26).1.30
141	パスカルの言葉	津田穰訳編	1951 (S26).1.30
142	音楽入門	諸井三郎	1951 (S26).1.30
143	レーニンの封印列車	ツワイク	1951 (S26).1.30
144	銀行	紅林茂夫	1951 (S26).1.30
145	日本爆撃記—米空軍作戦報告—	美代勇一訳	1951 (S26).2.28
146	十九世紀哲学史	三宅剛一	1951 (S26).2.28
147	科学人名辞典	田村松平編	1951 (S26).2.28
148	ドイツ愛唱歌集	大山定一訳編	1951 (S26).4.15
149	軍事基地	高木惣吉	1951 (S26).4.15
150	西洋古代哲学史	田中美知太郎	1951 (S26).9.25*
151	安楽死	山名正太郎	1951 (S26).4.30
152	音楽辞典	諸井三郎	1951 (S26).5.15
153	科学用語辞典	矢島祐利ほか	1951 (S26).5.20
154	哲学年表	高山岩男	1951 (S26).7.5
155	哲学人名辞典	相原信作	1951 (S26).6.20
156	アジア問題辞典	平野義太郎編	1951 (S26).6.20
157	マルティン・ルター	北森嘉蔵	1951 (S26).6.15

158	自然科学史	田中実	1951 (S26). 6 .20
159	私達の薬局	市橋立彦	1951 (S26). 6 .20
160	近代日本文学	唐木順三	1951 (S26). 6 .20
161	大地震	佐々憲三	1951 (S26). 6 .30
162	近代日本詩集	日夏耿之介	1951 (S26). 6 .30*
163	世界の山々	藤木九三	1951 (S26). 6 .30
164	小説入門	中村光夫	1951 (S26). 7 .15
165	ファウスト入門	大山定一	1951 (S26). 7 .15
166	知られざる漱石	小宮豊隆	1951 (S26). 7 .30
167	ネール首相の秘密	岡倉古志郎	1951 (S26). 7 .30
168	現代の英文学	深瀬基寛	1951 (S26). 8 .15
169	泡盛物語	佐藤垢石	1951 (S26). 8 .15
170	バルトとニーバーの論争	有賀鉄太郎ほか訳	1951 (S26). 8 .15
171	日本文学辞典	久松潜一	1951 (S26). 9 .15
172	新約聖書辞典	山谷省吾	1951 (S26). 9 .15
173	世界人権宣言	田畑茂二郎	1951 (S26). 8 .31
174	スタニラフスキー —モスクワ芸術座のたましひ—	山田肇	1951 (S26). 9 .15
175	抵抗詩人アラゴン	矢内原伊作	1951 (S26). 9 .15
176	中国文学入門	吉川幸次郎	1951 (S26).10.31
177	地球のまるい話	中谷宇吉郎	1951 (S26).10.31
178	宛名のない手紙	桑原武夫	1951 (S26).10.31
179	リルケ	谷友幸	1951 (S26).10.31
180	日本の国家	長谷川如是閑	1951 (S26).11.15
181	日本歴史辞典	和歌森太郎	1952 (S27). 1 .15
182	共産主義的人間	小田切秀雄	1951 (S26).12.25
183	啄木	中野重治	1951 (S26).12.25
184	一対一	吉田洋一	1952 (S27). 1 .15

185	水素爆弾と世界	伏見康治	1952 (S27) . 1 .15
186	憲法と近代的人間	末川博	1952 (S27) . 1 .30
187	富—その実体と幻像—	大塚久雄	1952 (S27) . 2 .15
188	憲法を守る力	佐藤功	1952 (S27) . 2 .15*
189	わが信念—病床にある友へ—	清沢満之	1952 (S27) . 2 .25
190	社会科学用語辞典	石上良平	1952 (S27) . 2 .25
191	万葉集入門	土屋文明	1952 (S27) . 3 .15
192	文芸用語辞典	河盛好蔵	1952 (S27) . 3 .25
193	ヘーゲル	松村一人ほか	1952 (S27) . 4 .15
194	日本歴史年表	和歌森太郎	1952 (S27) . 5 .15*
195	日本文学と中国文学	魚返善雄	1952 (S27) . 4 .30
196	マホメット	井筒俊彦	1952 (S27) . 4 .30
197	論理学入門	仁戸田六三郎	1952 (S27) . 5 .15
198	中国の古代国家	貝塚茂樹	1952 (S27) . 5 .30
199	孝行無用	戸川行男	1952 (S27) . 6 .1*
200	憲法入門	中村哲	1952 (S27) .10.30*
201	生物用語辞典	湯浅明	1952 (S27) .11.10
202	数学辞典	吉田洋一	1953 (S28) . 4 .30
203	法律学辞典	戒能通孝編	1953 (S28) . 1 .15
204	一般社会科辞典	岡田謙	1953 (S28) . 3 .10*
205	地学辞典	三野与吉	1953 (S28) . 6 .30
206	家庭科辞典	羽仁説子	1953 (S28) . 3 .30
207	東洋歴史辞典	小竹文夫編	1953 (S28) . 2 .15
208	世界史年表	尾鍋輝彦	1953 (S28) . 7 .25*
209	心理学辞典	相良守次	1953 (S28) . 9 .15*
210	良心と幸福	金子武蔵	1953 (S28) . 9 .30*
211	内村鑑三	森有正	1953 (S28) . 9 .30

212	日本旅行記	ウィルマン	1953 (S28).9.30
213	日本人の交際	和歌森太郎	1953 (S28).10.10
214	物理学辞典	金原寿郎ほか	1953 (S28).12.10
215	化学辞典	白井俊明	1954 (S29).1.15
216	西洋歴史辞典	尾鍋輝彦	1954 (S29).4.5
217	人文地理辞典	木内信蔵	1954 (S29).5.10*
218	映画作品辞典	筈見恒夫	1954 (S29).6.20
219	初等数学辞典	吉田洋一	1954 (S29).8.10
220	石川啄木詩集	壺井繁治編	1954 (S29).7.10*
221	室生犀星詩集	室生犀星編	1954 (S29).6.30
222	萩原朔太郎詩集	室生犀星編	1954 (S29).7.10
223	北原白秋詩集	室生犀星編	1954 (S29).8.25
224	上田敏詩集	日夏耿之介編	1954 (S29).8.25
225	木下杢太郎詩集	日夏耿之介編	1954 (S29).8.25
226	壺井繁治詩集—身体検査—	壺井繁治編	1954 (S29).9.25
227	岡本潤詩集	岡本潤編	1954 (S29).9.25
228	ひろし・ぬやま詩集	窪川鶴次郎編	1954 (S29).10.15
229	傑作と凡作の論理	植田寿蔵	1954 (S29).9.15
230	奥の細道	井本農一	1954 (S29).11.25
231	徒然草	斎藤清衛	1954 (S29).11.25
232	更級日記	関みさを	1954 (S29).11.25
233	方丈記	富倉徳次郎	1954 (S29).12.25
234	新古今集	久松潜一	1955 (S30).2.20
235	外来語辞典	あらかわ そおべい	1955 (S30).1.30
236	紫式部日記	松村博司	1955 (S30).2.20
237	黙阿弥	河竹繁俊	1955 (S30).3.15
238	中央アジア史	松田寿男	1955 (S30).3.10

239	東西文化の交流	伊瀬仙太郎	1955 (S30). 3 .30
240	ルネサンス	増田重光	1955 (S30). 3 .30
241	イギリス憲政史	松平平治	1955 (S30). 4 .30
242	古事記	倉野憲司	1955 (S30). 5 .15
243	原始社会	角田文衛	1955 (S30). 4 .25
244	中国の国民党と共産党	波多野乾一	1955 (S30). 6 .25
245	アメリカ独立革命	中屋健一	1955 (S30). 4 .30
246	南北戦争	山岸義夫	1955 (S30). 5 .10
247	堤中納言物語	清水泰	1955 (S30). 5 .15
248	馬琴	麻生磯次	1955 (S30). 5 .25
249	玉葉と風雅	井上豊	1955 (S30). 6 .15
250	律令制度の社会と文化	宮城栄昌	1955 (S30). 5 .15
251	神話伝承と古代文化	肥後和男	1955 (S30). 6 .15
252	世阿弥	田中允	1955 (S30). 7 .20
253	枕草子	池田亀鑑	1955 (S30). 7 .15
254	事典 音楽通論	田辺秀雄	1955 (S30). 9 .15
255	歌劇入門	渡辺護	1955 (S30). 6 .30
256	モーツァルト	木村重雄	1955 (S30). 7 .15
257	ブラームス	門馬直美	1955 (S30). 6 .30
258	世界のオペラ	宮沢縦一	1955 (S30). 8 .30
259	続モーツァルト—オペラその他—	木村重雄	1955 (S30). 8 .30
260	古今集	窪田章一郎	1955 (S30). 7 .15
261	伊勢物語	松尾聡	1955 (S30). 8 .15
262	増鏡	中村直勝	1955 (S30). 9 .15
263	インドの古代社会	中村元	1955 (S30). 9 .20
264	万葉集辞典	久松潜一	1955 (S30). 10.10
265	近松	守随憲治	1955 (S30). 10.15

266	漢代の社会	鎌田重雄	1955 (S30) .10.15
267	日本原始文化	樋口清之	1955 (S30) .10.30
268	サラセン文化	前島信次	1955 (S30) .10.25
269	シューマン	渡鏡子	1955 (S30) .10.30
270	新劇辞典	田中千禾夫	1955 (S30) .11.30
271	明治社会史	福地重孝	1955 (S30) .11.15
272	古代日本の交通	坂本太郎	1955 (S30) .12.20
273	日本霊異記	松浦貞俊	1956 (S31) . 1 .25
274	イラン文化	蒲生礼一	1956 (S31) . 2 .5
275	蕪村	栗山理一	1955 (S30) .12.20
276	ヴェルサイユ体制	小林栄三郎	1956 (S31) . 1 .20
277	幕藩体制	伊東多三郎	1956 (S31) . 1 .25
278	蜻蛉日記	秋山虔	1956 (S31) . 1 .25
279	江戸時代の三大改革	津田秀夫	1956 (S31) . 1 .25
280	雨月物語	重友毅	1956 (S31) . 1 .30
281	良寛	関克巳	1956 (S31) . 2 .15
282	アヘン戦争と太平天国	増井経夫	1956 (S31) . 3 .25
283	日本名著辞典	時野谷勝	1956 (S31) . 6 .20
284	中世ヨーロッパ	藤田重行	1956 (S31) . 7 .30
285	中世日本の形成	芳賀幸四郎	1956 (S31) . 9 .25
286	フランス革命	豊田堯	1956 (S31) .10.10
287	ショパン	野村光一	1956 (S31) .10.20
288	遼の社会と文化	島田正郎	1956 (S31) .12.10
289	産業革命	藤田重行	1957 (S32) . 2 .25
290	日本文法辞典	阪倉篤義	1957 (S32) . 2 .25
291	プロコフィエフ	戸田邦雄	1957 (S32) . 3 .15
292	宗教改革史	半田元夫	1957 (S32) . 6 .30

293	ニュー・デール	中屋健一	1957 (S32).9.10
294	ストラヴィンスキー	塚谷晃弘	1957 (S32).9.10
295	ヴェルデイ	福原信夫	1957 (S32).11.30
296	ビゼー	宮沢縦一	1958 (S33).3.10
297	実存	金子武蔵	1958 (S33).3.15
298	キリスト教史	半田元夫	1958 (S33).5.30
299	三月革命	矢田俊隆	1958 (S33).8.10
300	フランス第五共和国	木下広居	1959 (S34).2.10
301	古典的と浪漫的	大西克礼	1960 (S35).4.10